

# 槐 かい

岡井省二創刊

平成29年3月号

平成二十九年三月一日発行 第二十七巻第三号 通巻第三〇九号 毎月一回一日発行  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 初景色

高橋将夫

母ありてこそ故郷の初景色  
平和とは田んぼに集ふ初雀  
巫女はこびくる若水のゆれもせず  
見えぬ色聞こえぬ音も初景色

橙を飾つて核を持たぬ国  
抱へれば福の重さや鏡餅  
未来より過去の話で年の酒  
色町の昔話で笑初  
をみな子の股ぐらくぐる手毬かな  
若菜野の賑はつてをり喜寿米寿  
良き時代を生きて蒲団で大往生



# 槐安集

水野恒彦

眠る白鳥夢の容といふべかり  
玄冬の魑魅<sup>すだま</sup>はどこに眠りしか  
一角獣に渺々たりし冬の海  
磐座の時空に咲けり冬董  
生も死も刻のまぼろし冬銀河

加藤みき

御降りやほてりし顔をうち鎮め  
初昔つぎつぎ人を送りたる  
狐火や上着ひっかけ後ろ前  
道の上に道がありけり初明り  
湯豆腐や束の間座る暈かな

中島陽華

火焰茸いやさかの笛引き寄せて  
神々し齒抜けの翁の胡麻叩き  
詰り寄る子の目うつくし銀杏散る  
笛太鼓おどけ飯屋の穴まどひ  
蝶凍つや朱の極楽橋の上

竹内悦子

霜降の肉は暈に鍋奉行  
狐火や十一月の手術台  
三寒の四温となりて退院す  
東入る西入るは京晦日蕎麦  
神鶏の暁の一声悦の春



雨村敏子

蓮根の節のくびれよ四方拝  
じいちゃん顔中笑ふ粥柱  
山眠る永遠もまた瞬間も  
枯のいろ美しきと思ふ年ごとに  
枯果てて明るくなりぬ野も吾も

本多俊子

我なりに胸の埋み火たやすまじ  
風呂吹の一きれつつや高嶺星  
枯枝のひかりの中に椅子ひとつ  
たましひの乾く静けさ石路の花  
心より頷き合いて冬薔薇

近藤喜子

凍蝶の一つになれぬ身と心  
冬帝やそびえ立ちたる山の影  
狐火や滅びしものを誘ひ出す  
梟の見てをり我に見えぬもの  
雪女マグマのやうな情を秘む

瀬川公馨

月光やベートーヴェンを泣かせたる  
しろがねの花咲く霜の朝なれ  
煤逃げの主人を連れて帰りたる  
水漬やくどくど反芻してゐたり  
大池に人寄せてをる鳩

久保東海司

白息の往来交ふ櫓寺普請  
鳩の湖末広がり投網打つ  
雪吊りの弛みひとつも宥されず  
着水の二羽は雌雄のかいつぶり  
冠雪の富士遠目にも美しや

柳川 晋

獺はじめ人は仲間を殺す猿  
吉凶天にあり地にはふくと汁  
厚切りの沢庵を噛む佳き日かな  
イルミネーションのつは狐の灯  
エオルスの落してゆきし虚落笛

熊川 暁子

空を見て海見て十二月八日  
寺焚火とぎに五欲の炎あげ  
落葉しつくして大樹はソクラテス  
パン種の伸びちぢみして寒気団  
面倒が積つて坐る大晦日

寺田 すす江

天日の山茶花白を極めけり  
ぼやきにも共鳴したる青女かな  
一陽来復まこと人間臭くなる  
星冴ゆる記憶の壺のすこし開く  
ものの翳胸にたたみて冬銀河

岩下芳子

洞いくつ猷抱きて山眠る  
冬帝のおもひのままに照り翳り  
顔見せや上方の所作匂ひ立つ  
土塊のあはひうとうと冬の虫  
明け方の大気まつさら息白し

近藤紀子

タイシルクのマフラーにこにこ巻きくるる  
満艦飾の爪の子帰る冬休み  
吊るし柿のぼつたり重き嬉しさよ  
妣のもんぺ繕ひのあと二つ三つ  
聞きなれし声降りきたる冬銀河

岩月優美子

大年のすたとんと落ちし物の影  
マトリョーシカの真中に居たき寒さかな  
凍星や心に炎ゆるものを抱く  
枯蓮の再起のちから密やかに  
王様の椅子に白鳥座りたる

竹中一花

街なかの猷道なり鎌鼬  
野を染めし色は光や福寿草  
小悪魔と妖精モンプアのサンバ聖夜明く  
大年の空に九字切る水烟  
寒風や市の聖の鹿角杖

前田美恵子

魁となる適塾や冬木の芽  
大発会北浜翁の思ひ入れ  
数へ日や急ぎをりたる鴉二羽  
針を持つ母に冬至の陽のやさし  
日向ぼこいつしか幼の深眠り

中田禎子

灯の入る終天神裏通り  
仲良しの左右に別れ鎌鼬  
ミステリーの鋭き刃氷柱かな  
群青の闇に太りし氷柱かな  
飾り窓にピエロ人形冬の月





# 槐市集

後藤マツエ

闇下りていよよ冴えたる冬の星  
年の瀬や当てにもされぬ飾り祖母  
強風の上げる悲鳴の虎落笛  
埋み火のかすかに残る傘寿かな  
寒奈落温泉めぐる夢企画

阪倉孝子

美しき木霊を抱き山眠る  
魔除けなる赤きコートにつつまるる  
乾杯や葉牡丹の渦ほぐれける  
束ねたる言の葉眠る実千両  
いつか行くはるかな聖地冬の虹

柴田靖子

冬蜂の一人生きぬく強さ見む  
仄明り寒紅梅をかがやかす  
私見てと声かけさうな寒椿  
片隅の八手の花にも朝日さし  
血潮まで淀みし今日の冬日かな

庄司久美子

夕暮の山里の黒雪螢  
パトカーのサイレン近し冬の雷  
龍の玉跳ぶや白雲湧きにける  
日面テの塙の冬芽鳥の影  
強霜のめぐらす大地さざめけれ



杉原ツタ子

里山や春待月の日の光  
ゆかしさや枝折戸の先実むらさき  
光背も如来坐像も師走かな  
結界になほ貼紙や夕紅葉  
近江なる鳩の番の疎水かな

高野昌代

遷宮の神の使ひや鹿鳴ける  
吹く風にマスク美人もありにけり  
酸莖売り樽もて婆の京言葉  
父に似る慣れぬ手つきの蕘仕事  
馬関の美味なる河豚は幻か

竹村 淳

長き夜を昭和昭和の歌合戦  
嵐山金欄緞子に紅葉して  
新米を新碗に盛り差向い  
生き物をすべて懐山眠る  
木枯しにレジ袋舞ふ海月のよに

田中信行

信濃路や冬満月と農家あり  
重吉の詩と出合ふ夜雪の降る  
吊し柿夕日に溶けて信濃かな  
対岸の国との彼我差去年今年  
あれこれと思ひ出す夜のゆず湯かな

時 澤 藍

ままならぬ北国日和年用意  
いよいよぞ覚悟はよいか雪起こし  
無垢無菌息をのみ込む雪景色  
初雪や清められたる人間界  
残すもの思ひ出だけや梅擬

中 貞 子

二本の紅葉ありけり尉と姥  
寒 昴 黒 豆 の 艶 重 箱 に  
二の重の金粉付きし太箸に  
袖風呂や極楽絵図のごとくゐる  
山眠る麓に鯉の動かざる

# 槐集

## 高橋将夫選

悴みし掌に詩を握りしめてゐる 大阪 有松 洋子

一頭の黒鹿毛が統ぶ枯野原

焚火する固くさびしき土のため

枯蟻螂仏教説話語りをり

寒卯日あたる方へころがりぬ

屈折は玉への道や漱石忌

何もかも忘れたやうに山眠る

満開とならぬ恋あり冬桜

鴛鴦の代はる代はるに見せる尻

命毛をあやつる力花八手

何の夢抱いて銀杏落葉かな

草珊瑚に人の思ひに我が思ひ

皇帝ダリア冬日大事にしてをりぬ

暮れなんと冬帝雲を乗りかへて

冬銀河一人の庭でありにけり

手を洗ふ水の重さや冬紅葉 大阪 平野 多聞

茶の花も戦も知らぬ大学生

冴ゆる夜やスーパームーンを懐に

焚火から愛の生まれし二つ影

去年今年等身大の影踏んで

南天のたわわなりけり福の神 枚方 中 貞子

抽出しに六文銭や煤籠

白椿の前通りたる和服かな

置き場所を譲りて美しき古曆

余生なほ冬満月の明るさよ

冬帝やインクの色に日本海 井上 静子

雪女一駅乗りて消えてゆく

糲殻に埋まりし芋の精気かな

辞書に習ふ漢字のあまた大根焚

猫の目の何か言ひたき漱石忌

# 銀河往来 高橋将夫

## ◆槐集観照

焚火する固くさびしき土のため 有松 洋子

冬の土に固さと淋しさをみた感性。焚火はそれを温めるとみたやさしさに惹かれる。

〈悴みし掌に詩を握りしめてゐる〉の句、詩に対する作者の思いが垣間見える。〈一頭の黒鹿毛が統ぶ枯野原〉の句、黒鹿毛の馬の雄姿が目につかぬ。句の姿がいい。

〈寒卯日あたる方へころがりぬ〉の句、卯は温められると孵化する。寒卯とてぬくもりが恋しいのだ。

何もかも忘れたやうに山眠る 江島 照美

「山眠る」は「山笑ふ」とともに擬人法の素晴らしい季語だが、「何もかも忘れたやうに」は「山眠る」の本質に迫っている。〈命毛をあやつる力花八手〉の句、素晴らしい書は筆の命毛を見事にあやつっているのだろう。

〈屈折は玉への道や漱石忌〉の句、屈折を経てこそ玉になれるという。なるほど、三角、四角、五角：屈折を重ねると円に近づく。

何の夢抱いて銀杏落葉かな 犬塚 芳子

銀杏には夢があつた。落葉になつた今も夢はあるのだろう。ご高齡の作者、まだまだお若い。

〈皇帝ダリア冬日大事にしてをりぬ〉の句、背が高く大輪の皇帝ダリアの本質に迫っている。〈暮れなんと冬帝雪を乗りかへて〉

の句、冬の夕暮れがユーモラスに描かれている。

冴ゆる夜やスパームーンを懐に 平野 多聞

スパームーンを見て、その感動的な姿を胸に収めた。

〈手を洗ふ水の重さや冬紅葉〉の「水の重さ」、〈茶の花も戦も知らぬ大学生〉の「茶の花」、〈去年今年等身大の影踏んで〉の「等身大の影」に注目したい。

置き場所を譲りて美しき古曆 中 貞子

卓上の古曆が新曆に替わつた。「場所を譲り」の措辞がいかにも作者らしいと思う。〈余生なほ冬満月の明るさよ〉の句、場所を譲つてもまだまだ健在。

雪女一駅乗りて消えてゆく 井上 静子

雪女とのつかの間のえにし。なんとも不思議な魅力の一句。

柚子風呂やアルキメデスとなりける 中島 昌子

あふれそうな風呂に柚子が浮かんでいる。浮力の原理のアルキメデスを思い浮かべたところがおもしろい。

〈鳶の輪に納まる一山木守柿〉の句、「鳶の輪に納まる一山」の着眼に共感。

行く先はどこにしゃうか宝船 中谷 富子

心の余裕を感じさせるめでたい一句。

〈産道を抜けて参道初詣〉はなかなか大胆な一句。これもめでたい。一（以下略）